

読みとり付加型あらすじ作成 — 宮澤賢治「月夜のでんしんばしら」編 —

岡田 浩行*

(令和5年2月1日受理)

要約

本稿は、小説の理解力を高めることを目的とした、読みとり付加型のあらすじを作成する活動の実践報告である。宮澤賢治『注文の多い料理店』収載の小説を扱う一連の活動のうち、今回は「月夜のでんしんばしら」を扱った。同作は、電信柱の行軍に地方への電信網の普及が意味されていること、夜の駐車場の情景が物語世界を喚起すること、電気総長の造形に人間に対する電気の存在の意味が示唆されていることなどが、理解の要点となる。結果は、近接した場面間の連関については、異なった事物の関係についても、読みとる傾向が認められた。距離のある場面間の連関についても、あらすじ中に言及する傾向が認められた。小説理解の深化がうかがえる一方で、離れた場面間の対比的な関係、同じく前後照応について読みとるあらすじが少ないという課題も残った。以上より、総じてこのあらすじ作成の継続的な活動が、小説の理解力の醸成に有効であることが示されたと考える。

1. はじめに：実践の概要

本稿は、私立の中高一貫校における中学一年生の国語の授業で、2019年度に行ったあらすじ作成の活動のうち、「狼森と策森、盗森」(岡田(2022))、「水仙月の四日」(岡田(2003))に続く、「月夜のでんしんばしら」に関する報告および考察である。

読みとり付加型のあらすじを書く本活動は、小説(物語教材)の理解力の醸成を目的としている。

「一人物の生活とその生活を叙述する形式が必然的にうける制約から生じる食い違い」(308)に起因する「空所」(312)があるなら(Iser(1976))、比喩的に言えば、その埋め方は無数にあると言えよう。解釈共同体への参加は、小説の読みを「一貫した意味内容」(河野・大貫(2006, 26))に限定しない、いやできないと思うのである。

しかし、その過程において、ある許容度をもってだが、「一貫した意味内容」を想定させるもの

があるように感じるし、そこに個人差が生じているのも否めない。では、その差を埋めるための取り組みを考えることが必要なのではないか、その意識が本活動の柱となっている。

読みとり付加型のあらすじを書くことは、読みとりとあらすじ作成を同時に行うことを意味する。あらすじを書きつつ、気づいた文脈を書き加えるのだ。あらすじ作成によって、セグメント相互の「結合可能性」(Iser(1976, 313))を見出そうというのである。

以下、あらすじの評価の観点(〈隠されたストーリー〉)を、小説の冒頭から順にまとめる。その上で、生徒らの作成したあらすじを、観点ごとに分析する。最終的に「狼森と策森、盗森」から引き続き活動の成果と課題をまとめる。

なお、あらすじ分析の指標とするのは、次の「相関分類」(表1)である。

*岩手大学教育学部

表1 相関分類

連関Ⅰ		
I a1/2 (a1:近接/a2遠隔)	: 物語世界内の記述の距離による区別	
I b1/2 (b1:共通・類似/b2:相違・対照)	: 関係的な区別	
I c1/2/3/4/5/6/7 (c1:因果/c2:反復/c3:対句/c4:対比/c5:例外/c6:矛盾/c7:順接)	: 論理的な区別	
単独Ⅱ		
Ⅱイ: 物語世界固有の決まり事	Ⅱロ: 額縁	Ⅱハ: 外部 (情報の参照)

2. 電信柱の行軍の表すもの

(1) 月夜のでんしんばしら」の梗概

宮澤賢治「月夜のでんしんばしら」(『注文の多い料理店』杜陵出版部・東京光原社、大正13・12 ※…以下、宮澤賢治のテキストは、すべて『新校本宮澤賢治全集』(筑摩書房)による。)は、シグナルが下がって、汽車が駅構内に進入して停車したあと、再びシグナルが上がるまでの間の話である。その晩、鉄道線路の犬走りを歩いていた恭一が、駐車場の見える所まで来た時、シグナルが下がったのを合図に、電信柱たちが恭一の眼前で北の方へ歩きだした。傷病兵さながらの痛んだ電信柱も止まることを許されない。九日の月が現れると、電信柱たちはご機嫌で、勇んで行軍を行う。やがて隊列に号令をかける電気総長に出会う。電気総長は恭一と握手した折、電流を流して恭一を驚かせましたが、電気の普及にまつわる人間たちの可笑しい失敗談を話して聞かせました。やがて汽車がやってきたため、電気総長は行軍を中止させるが、客車内の電燈が消えていることに気づく。「こいつはしまつた。」と、恭一が制止するより早く電気総長が列車の下に潜り込むと、俄かに客車内が明るくなった。乗客の一人の小さな子は「あかるくなった、わあい。」と歓声をあげる。シグナルは再び上がり、月は再び雲の中に。汽車は停車場へ到着する一という内容である。

(2) 電気通信網の延伸:〈隠されたストーリー〉①

① 読みとり

「月夜のでんしんばしら」という小説自体の理

解としては、まず電気の普及を物語っていると捉えられ、やがて、シベリア派兵、近代の抑圧構造を表すなどと、同時代資料との関係から多様に論じられていったように思う。

具体的には、恭一が目撃した、電信柱の列が「大威張りで一ぺんに北のはうへ歩きだしました」(※…下線は稿者により、/は改行を示す。以下同じ。)という行軍をおこなう事象が、物語世界内でどのような意味をもつかが問われている。

先行研究を見ると、まず「東京から地方へ、地域に、生活に、身体に、新文明=近代文明は徐々に浸透する」(安藤(1996, 177))というように電力の普及と捉えられた⁽¹⁾。谷川(1985)は、恭一には「いまわしい秩序」(128)のように見えるが、その実、普遍的な「自然力を法則的に制御したシステム」(137)と措定した。やがて、例えば「地方のレベルでみた場合」では「小資本の大資本への統合の流れ」、「国家レベル」では「シベリア派兵の流れ」と捉えたり(谷村(1995, 194)、「軍隊の様子は、「ロボット」の元の意味、「強制労働」に近い」とし、人間機械論へと接続させたり(秋枝(2006, 157))といったように、多様な理解が提示される流れがたしかにあった。

と同時に「鉄道システムのルールに縛られた電信柱たちの束の間の自己表現」(小関(2008, 120))を読むにせよ、近代のシステムというコードは堅持されてもいると言うべきかもしれない。

たしかに「北のはうへ歩きだしました」という方角の指標は、重要な情報を提供しよう。すなわち『注文の多い料理店』の「序」をコードに、作

中具体的な場所の明示こそないが、東北本線をイメージすることは自然であろうからだ（谷川（1985, 124）⁽²⁾）。また、「シグナルとシグナレス」（『岩手毎日新聞』大正12・5・11-15, 17, 18, 20-23）から「電気がいかに《東京》に象徴される近代文明と強く結び付いたもの」（大塚（1993, 197））であるかとは、すでに指摘されることである。さらに、作中の軍歌にある「一万五千人」という擬人化された電信柱の数は、柱の径間を50mと仮定すると、「東京一青森間」の距離に相当するとの指摘もある（加島（2011, 34））。

そう捉えるならば、この行軍は、地方への電気通信網の拡張を表すだろう。この場合、電信柱の行軍はメタファーということになる。

あるいはそうではなく、行軍自体が指示対象を現実には有していると捉えるならば、具体的な軍事行動を指すと捉えるむきもあろう。

電信柱たちの「軍歌」には、「でんしんばしらのぐんたいは／はやさせかいにたぐひなし」や「でんしんばしらのぐんたいは／きりつせかいにらびなし」という章句がある。これらは、先の二つの理解のどちらの論拠ともなりうる。すなわち、電気通信技術の発達・拡張の速度と正確さを表すともとれるし、その一方で、文字どおり、軍隊の機能性を物語るとも考えられるのである。

「肩にかけたるエポレット／重きつとめをしめすなり。」という章句も同様である。つまり、電気通信技術あるいは軍隊の、公共性を指すと、二様に捉えられるかもしれない。

しかし注目すべきは、「きさまらのうち、どつちかが参つても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけつたら。」と、一部の離脱が、「一万五千人みんな」に影響を及ぼすとし、決して許そうとしない強迫的なまでの同調性が際立つ点だろう。

この点は、電信網のイメージを、より物語世界に現前させると思われる。人間が行う行軍で、一人の離脱が行軍全体に支障をきたすとは考えにくいからである。

さらに後半に登場する電気総長の存在は、おとぎ話の作中人物らしくなく、「勢力不滅の法則や

熱力学第二則」を知る、開明的な人物でもある（4(1)参照）。それはこの行軍が軍事的であるよりも科学的であることを喚起する。そのことも踏まえるなら、電信柱の行軍は、電信網の地方への波及のメタファーと捉えるのが至当であろう。そして「重きつとめ」とは「電信柱の現実的意義の重大さ」（鳥居（1984, 30））となる。

少なくとも電気総長について付言すれば、5(1)で言及するような優しい一面もあるのだから、それらを等閑に付して「陸軍の独走をリード」（米地（2013, 139））する軍人を喚起するといった、外部コンテキストの過剰な参照は、本実践には相応しくあるまい⁽³⁾。実際、「シベリア出兵や文明化といった問題を作品に当てはめなくてもよい」（村上（2004, 12））という見解もある。

以上より、電信柱の行軍が、電信網の地方への延伸を表すことが〈隠されたストーリー〉①となる。

② あらすじの分析

該当箇所は、まず「北のはう」、軍歌および傷病兵と兵士間の会話、さらに同じ電信網内の一人である電気総長の科学的知見。

前者の「北のはう」は、多分に外部コンテキストに依存するようだが、軍歌との連関だけでも、地方への電気通信技術の普及は想起しうるので、比較的言及があるのではと推測する。なおここでは、前者のみを分析の観点とし、科学的知見については4(1)で再述する。

したがって相関分類は、近接の順接の連関〔I alblc7〕となる（傷病兵を焦点化するならば、他の電信柱の行軍と、近接の対比の相関と捉えうる。〔I alb2c4〕）。

では、あらすじを見てみよう。

まず該当箇所である軍隊の軍歌・進軍の方角に言及のあるあらすじは、176名（82%）。特に軍歌は同作の大きな特徴でもあり、これに着目するあらすじが多数にのぼることになった。

そのうち、電気通信網の敷設にどれだけ思い至っているかである。

- 【1】 今まで線路沿に立っていただけだった電しん柱が北に列になって歩きだしたのです。おまけにそれらは立派な軍歌まで歌い始めたのです。軍隊のようによどみなく進んでいくその様子はまるで電力供給が地方に波及するのを表したようでした。〔I alblc7〕（※…生徒の文は誤字なども含め原文ママである。以下同じ。）
- 【2】 「肩にかけたるエポレット。重きつとめをしめすなり。」とあるように「重きつとめをこれから果たすということが読みとれる。つまり地方への電気供給である。これから地方へ電気供給をするために、北へ歩き出したと考えられる。また（中略）「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむぢゃないか」とあり、つかれはてた二本の電信柱に元気な別の電信柱がどなっていることから、地方への電気供給をするために歩いていると考えられる。〔I alblc7〕
- 【3】 突然シグナルがさがりました。これは、特別珍しいことではありませんが、そのあと線路の左側にあるでんしんばしらが北に向かって行軍を始めました。その様子はまるで、電気が普及していない東北の方へ、電気を伝えているようでした。すると、どういうわけか、二本の電信柱が一緒になって歩いていた。その柱たちはいかにも疲れているようでした。やはり、東北へ電気を供給するのは生易しいことではないようです。〔I alblc7〕
- 【4】 北の方にも電気を供給しようというのだ。電信柱達は、歌を歌いながら仕事にはげんでいた。そして、皆この仕事に、ほこりを持っていた。しかし大変名誉なその仕事も楽なものではない。（中略）二本の柱がよろよろ倒れそうになった。〔I alblc7〕

まず該当箇所から、【1】～【4】のように、電信網の敷設を読みとったあらすじは、134名(63%)であった。

読みとりの手順をあらすじにみるならば、「北」

という方角に、【1】・【2】のように軍歌、【3】・【4】のように傷病兵と、事前に想定していた該当箇所を踏まえており、それによって電信網の普及を読みとるあらすじも少なくない数見られたと言ってよいだろう。

一方で、意気盛んな電信柱の行軍という文脈にあって、異質な二人の傷病兵については、文脈化の困難が予想されるかも知れない。実際、傷病兵も歩きをやめられないという状況に、事業の公共性や、事業遂行の困難さを読みとる【3】・【4】ほどではなくとも、傷病兵に言及しているあらすじは、35名(16%)にとどまっており、課題であろう。

3. 電信柱の行軍を現出させる情景

(1) 幻想の光源としての情景：〈隠されたストーリー〉②

① 読みとり

恭一が見た電信柱の行軍が起動した時、暗がりには浮かぶ駐車場の光景が「ぼつんとしたまつ赤なあかりや、硫黄のほのほのやうにぼうとした紫いろのあかりやらで、眼をほそくしてみると、まるで大きなお城があるやう」に見えていた。

さらに、行軍の光景が勇ましさを増すのは、「九日の月」が姿を表した時である。逆に、この行軍の終息とともに、「九日の月」もうろこ雲に隠れている。作中の月光への言及は次のとおりである。

a. 九日の月がそらにかゝつてゐました。そしてろこ雲が空いつばいでした。うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの底までもしみとほつてよろよろするといふふうでした。

b. 月がうろこ雲からぱつと出て、あたりはにかに明るくなりました。

でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌です。恭一の前に来ると、わざと肩をそびやかしたり、横めでわらつたりして過ぎるのでした。

c. でんしんばしらはしづかにうなり、シグナルがたりとあがつて、月はまたうろこ雲のなか

にはひりました。

そして汽車は、もう停車場へ着いたやうでした。

「停車場のあかり」の描写が、「単線区間で上下列車の行き違い（列車交換）を行う交換駅と仮定する」（28）と、「遠い駅に煌めく色鮮やかな光を目指し夜の線路を歩いた賢治が、実際に目にした光景をそのまま写し取ったもの」（29）と言えるほど、当時の鉄道システムから説明できることは報告されている（加島（2011））。

「幻想の起点・終点は月とシグナルによって表わされている」（安藤（1986, 108））ことも、「九日の月」の光が「「ふだん」は人びとの眼にみえない情景が顕現するように働く」（遠藤（2010, 38））ことも、幻想の光源を的確に捉えた指摘だろう。「鉄道線路」は畑や野原や山の風景を近代の鉄のテクノロジーが切り裂いていった軌跡」で、またそれゆえに「死の進軍を幻視、幻聴」せしめた（高橋（1996, 47））とみるより、整合性が認められるように思う⁽⁴⁾。

要するに宮澤賢治の小説世界を明るく照らす日の光に当て嵌めて考えてみてはどうかということである。「丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射し、青ぞらがいっぱいにあらはれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考へはじめました。そこでベゴ石も、しづかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。」「（「気のいい火山弾）」とある、あの日光である。本作をかえりみるならば、宮澤賢治の小説に通有の、日光さながらの役割を、この場合、月光が果たしていると捉えることができると考える次第だ。

この時の恭一の周囲には、電信柱の、風に「ぐわあん、ぐわあん」となる音があった。すなわち、人間のつくり出した技術と自然とが共演した情景こそが、電信柱や電気総長らの幻想の光源というわけである。

以上、「月夜のでんしんばしら」の物語世界の情景描写が幻想の光源となっているということが

〈隠されたストーリー〉②である。

② あらすじの分析

該当箇所は、作中冒頭の停車場の景色および「九日の月」の光という美しい情景で、それと物語世界の非現実的な幻想とを連関させること。さらに「九日の月」の出現（本文b）と隠れ（本文c）との照応を捉えること。いずれも、物語世界の幻想を映す光源が何かの理解に関わるであろう。

両者とも遠隔の連関となるが、前者は停車場の夜景もしくは「九日の月」が電信柱の行軍を起動させているという、因果の連関（〔I a2b2c1〕）、後者は同じ「九日の月」の異なった様態の間の対比（〔I a2b1c4〕）を捉えるものとなっている。この後者は、遠隔であると同時に、月という同一事象の反復が見てとれるので、読みとりの力が端的に見てとることができるだろう。

なお、幻想を映す光源という点では、「幻想の起点・終点は月とシグナルによって表わされている」とされていたように、美しい月光の他に、シグナルの切り替えの方も、幻想を起動するトリガーとして無視できない。よって本章では、美しい情景にあわせてこのシグナルについても、分析の観点としたい（〔I a2b1c4〕）。

では、あらすじの分析である。

幻想を映す光源の内、停車場の景色への言及は、40名（19%）。九日の月の光の出現もしくは隠れのどちらか一つへの言及は、40名（19%）である。

しかし、単に該当箇所と言及するだけでなく、両者が幻想の光源であると文脈を措定できるかが肝要であろう。

【5】 恭一はある晩命の危険性があり、法にもふれるような線路の横を歩いていました。すると、駅に近づいていくと大きな城のように見えて幻覚が起こっていました。〔I a2b2c1〕

【5】 のように、停車場の夜景を幻想の光源と捉えるあらすじは、2名（1%）であった。

【6】 二人の影ももうずっと遠くの緑青いろの林の

方へ行ってしまう、月がうろこ雲からぱつとでて、多分、柱たちも上機嫌なんでしょう。〔I a2b2c1〕

- 【7】月は柱達の行軍を応援しているかのように、うろこ雲からぱつと出て、あたりはにわか
明るくなりました。〔I a2b2c1〕

一方、【6】・【7】のように、月の光を幻想の光源と捉えるあらすじは、6名（3%）。

これと同時に、九日の月の光には、出現と隠れとの、前半部と末尾の照応という重要な点がある。

- 【8】汽車の電燈はつき子どもの喜ぶこえがきこえました。すると月はうろこ雲に再び消えてしまいました。総長が現れると月が現れ、総長が消えると月が消えたのです。まるで総長と月は似たような存在なのでした。〔I a2b1c4〕

- 【9】停車場が見えるところまで最初から歩いていたのに、しかも月がうろこ雲から出てからまた入るまでの短い時間なのに、ときの流れが早いのか、それとも賢治が短い時間を長い文で書いたかのどちらかです。〔I a2b1c4〕

【8】と【9】は、月の光の照応の連関を捉えたあらすじと言えるが、斯様に文脈化しているあらすじは、4名（2%）であった。

以上、停車場の夜景も月の光も、文脈化は不十分と言えよう。特に読みとりの力がはかられる月光の対照については、課題だ。情景描写が何を意味するのか、どのような文脈を示唆するのか、線條性への意識化が必要である。

それでは、幻想のトリガーとしての、シグナル柱についても付言したい。

シグナル柱に言及したあらすじは、18名（8%）であった。

- 【10】そしてシグナルが上がったということはシグナルが下がって電車が通過するまでの普通ならあつという間なはずの希妙な話でした。〔I a2b1c4〕

【10】のように、冒頭と末尾の照応を捉えたあらすじは、8名（4%）にとどまった。やはり離れた場面間の文脈化は課題と言わざるをえない。

4. 近代の科学技術と人間との関係

- (1) 電気通信技術からの威圧：〈隠されたストーリー〉③

① 読みとり

恭一は、当初、眼前に展開された電信柱の行軍の光景を、手放して歓迎した訳ではない。それには電信柱や電気総長の恭一に対する態度が影響していたであろう。

すなわち、電信柱らの「大威張りで一ぺんに北のはうへ歩きだしました」であったり、「いかにも恭一をばかにしたやうに、じろじろ横めでみて通りすぎます」といった威圧的なふるまい。あるいは電気総長が握手した恭一に電気を流して、「はあ、だいぶひびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしとも少し強く握手すればまあ黒焦げだね。」とうそぶいてみたり、「電気総長といふのは、やはり電気的一种ですか。」という恭一の言葉に、「わからん子供だな。ただの電気ではないさ。」と気分を害したりといった、電気総長の横柄な態度に他ならない。

電気総長の理解について、先行研究を参照するとき、安藤（1996）に、「近代文明にとまどい、困惑する逸話の登場人物たち、「月夜のでんしんばしら」の特質は、こうした人間みずからが逸話を語り継ぐのではなく、とまどいや困惑を引き起こした電気の側から逸話を語っていることにあるだろう。近代文明そのものであり、かつ、その普遍化を目指す側から〈力〉を誇示せしめる。」（178）とあるが、その威圧的な態度の理由への言及は示唆に富む。

その意味で、電気総長とは、「ダイナモ」（伊藤（2011, 26））といったものより、電気あるいは近代科学技術そのもの、「電気の不思議な力を体現している存在」（村上（2004, 16））というように高い抽象度で捉えるべきかと思う。なるほど、電気総長、電信柱の恭一への威圧的な態度は顕著な

のだが、それは宮澤賢治の小説で、自然が人に対して見せる、あの態度と同種のものとして位置づけることも可能だということだ。すなわち、「そして岩手山は、またすましてそらを向きました。」(「狼森と策森、盗森」)、「ははあ、あいつらは岩頸だな。(中略)」／そこで大学士はいゝ気になって、／仰向けのみゝ手を振って、／岩頸の講義をはじめ出した。(中略) 俄かにラクシャン第一子が／雷のやうに怒鳴り出した。(中略)「(中略) 百万の雷を集めて、地面をぐらぐら云はせてやる。丁度、榎ノ木大学士といふものが、おれのどなりをひょっと聞いて、びっくりして頭をふらふら、ゆすぶったやうにだ。ハッハッハ。」(「榎ノ木大学士の野宿」)

つまり、威圧的ではあっても、それは優位の存在に見合った態度であり、人間もそれを許容するという意味で、決して敵対的・排他的ではない種類のものなのである。

ただその場合、自然の優位にあたるのは、この場合何かが肝要で、そしてそれは、単に人間を黒焦げにしうる存在の優位性のみ由来するのではなく、科学的知識の有無にかかっていたと考えられるということなのである。

d. 「おまへは英語はわかるかい、ね、 SEND、マイブーツ、インスタンテウリイすぐ長靴送れとかうだらう、するとカルクシヤイヤのおやぢめ、あわてくさつておれのでんしんのはりがねに長靴をぶらさげたよ。はつはつは、いや迷惑したよ。それから英国ばかりぢやない、十二月ころ兵営へ行つてみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵殿に云はれて新兵が電燈をふつふつと吹いて消さうとしてゐるのが毎年五人や六人はある。おれの兵隊にはそんなものは一人もないからな。おまへの町だつてさうだ、はじめて電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百万石ぐらゐる油をつかふだらうかなんて云つたもんだ。はつはつは、どうだ、もつともそれはおれのやうに勢力不滅の法則や熱力学第二則が

わかるとあんまりをかしくもないがね、どうだ、ほくの軍隊は規律がいゝだらう。軍歌にもちやんとさう云つてあるんだ。」

電気総長の話は、電気は無知な人間を笑いの対象としたものである。電信網らの人間に対する優位性は、電気の知識の有無もしくは多寡に起因していると言えるのである。電気への感動は間違はなくある、だが「電気というもののすばらしい世界を、知的理解としてではなく、「心象」の世界において、あるいは詩的な豊かさにおいて、自分のものとした」(鳥居(1984, 32))としてしまっているのかは、やや疑問が残ると思う。

以上、人間の科学についての認識不足を踏まえ、電信網らが威圧的な態度をとることが、〈隠されたストーリー〉③とする。

② あらすじの分析

該当箇所は、「大威張りで一ぺんに北のはうへ歩きだしました」・「いかにも恭一をばかにしたやうに」や、「わざと肩をそびやかしたり、横めでわらつたりして過ぎる」といった、電信柱らの居丈高なさま。さらに「わからん子供だな。」といった、電気総長の横柄な態度。それらを捉えることは、近接の反復であり(〔I a1b1c2、I a1b2c2〕)、生徒らの気づきが期待される。

さらに、電気総長の話す電気を巡る挿話(本文d)に着目し、電気総長の横柄さとのあいだに、電気に対し人間が無知だから人間を威圧する態度をとるという、因果の連関を想定することも考えうる(〔I a2b1c1〕)。電気をめぐる笑い話がなぜここで語られなければならなかったか、判断に迷うのではないかと思われ、それを威圧的な態度の背景に位置づけるあらすじは数少ないのではと推測される。

ではあらすじ分析である。

まず電信柱の恭一に対する威圧的な態度に言及したあらすじは、90名(42%)を数えた。だが、電気総長の同様なふるまいへの言及は少なく、10名(5%)。この少ない言及のなかで、根拠として、

後述のとおり、電気総長が恭一に語った電気をめぐる人間の笑い話を挙げる例もあった。

まず、その、電気総長が語った人間の笑い話については、生徒らのあらすじにおいても少なからず言及があった（64名（30%））。

【11】昔は石油や油を使っていたのであかりをふっふっと吹いて火をけしていたが電気を使うようになっても吹いて明りをけそうとしている人々が何人かたまにいる。時代の変化にまだ追いつけていない人がいるということ。〔I a2b1c1〕

【12】するとあるとき線路の左側で「ぐわあん、ぐわあん」とうなっていたでんしんばしらが、大威張りで一ぺんに北の方へ歩き出したのでした。つまり彼ら（電信柱）が北へ歩くことは都市部から離れた所への電気補給でした。（中略）恭一は安心しておじさんと話していました。するとじいさんが英国の有名な話をし始めました。電気総長はその当社の先しん国である英国に注目し、田舎などの電気が普及していない所に電気を届けようとしたのでした。〔I a2b1c1〕

だが、【11】や【12】のように電気総長が語った笑い話は、多くのあらすじにおいて、単に略記されるか、そうでなければ、電気の普及に関連づけられるにとどまっている。

そんななか、5名（2%）だが、笑い話に電気総長の威圧的な態度を読みとるあらすじも見られた。

【13】リズムカルな軍歌も聞こえてきて、工兵隊、竜騎兵、擲弾兵など木でできた電信柱の兵隊たちが、恭一を横目にぞくぞくと通りすぎていった。やがて、電信柱の兵隊たちに号令をかける一人の老人がやってきた、「おれは電機総長だよ」と恭一に名乗る、電気総長は、自分は電気のすべての長で電信柱の兵隊たちの隊長であることを言い、勢力不滅の法則な

どや熱力学第二則などについて恭一にじまんする。〔I a1b2c2〕

【14】「～でんしんばしらの列が大威張りで一ぺんに北のはうへ歩きだしました。」（中略）と書いてあることから、電力の供給が地方への波及を示している。（中略）そして、手をにぎると電気を流して、少しびびらせようとしたけど、恭一があまりにびっくりし、こわがっていたので、気の毒になり静かに話しかけた。これは、電気総長の優しさで恭一を落ちつかせた。電気総長は、世界の国や法則などの話をして、自まんげに話し、恭一が電気の一種かといいた時には少しむっとして、電気の長だと言いつたり、長は面白いと聞かれたらとても楽しそうになったので、この仕事にとってもやりがいを感じていることがわかる。〔I a1b2c2〕

電気総長の話す笑い話は、電気に対する人間の無知はもちろんだが、一方で人間に対する電気通信技術の側の知的な優位性も物語る。【13】や【14】は、そうした電気総長の思想傾向を措定するあらすじと書いていいにせよ、明確な因果関係を指摘するには至っていないのも事実だ。なぜ電気総長がこの笑い話を話さなければならなかったのかという発想が重要だろう。笑い話については、電気総長と恭一との関係性という別の観点からも考えられるので、再度ふり返ることとする（5(1)参照）。

(2) 近代化における人間の疎外—：〈隠されたストーリー〉④

① 読みとり

前節で見た、電気通信技術の側の威圧的な態度は、当然それを見ている人間たちに影響しないわけにはいくまい。電信網の延伸は、良いことばかりでないことは、恭一の行軍を見る様子が表している。ここで電信網に対する、人間の側の反応を考察する必要がある。

e. どんどんどんやつて行き、恭一は見てみるのさへ少しつかれてぼんやりになりました。でんしんばしらは、まるで川の水のやうに、次から次とやつて来ます。みんな恭一のことを見て行くのですけれども、恭一はもう頭が痛くなつてだまつて下を見てみました。

先行研究においてみても、理解の難しい点であろう。電信柱の軍隊イメージが「恭一を恐れさせる」結果と「電信柱の現実的意義の重大さ」とは、そぐわないようだ（鳥居（1984, 30）。「幻想が激しさを増す」（安藤（1986, 108））結果か、あるいは電信網という「近代文明の申し子」の規律と「懲罰」への「懐疑」か（谷川（1985, 133）⁽⁵⁾）、ないしは「電気で動く社会の不自由さのようなものを人間と機械の中間的存在である「電信柱」によって感じている」（秋枝（2006, 156））結果の痛苦とするか。

行軍を見て恭一が頭痛を起こす理由が、特段あるようには思えない。そうであれば、軍隊の行進自体、すなわち電信通信技術の進展という近代化の推移という、外部コンテキストに原因を探らざるをえない。つまり電気が人に負荷を与える事実を表しているとすべきだ⁽⁶⁾。例えば、夏目漱石が「汽車汽船は勿論電信電話自動車」といった活力節約の推進を一因とした「現代日本の開化は皮相上滑りの開化」で、人々を「神経衰弱」に陥らせていると、夙に指摘していたものである（『現代日本の開化』『朝日講演集』明治44・11）。

以上から、恭一の痛苦が、近代化が人に強い心理的な圧迫を表すと捉えることが〈隠されたストーリー〉④となる。

② あらすじの分析

該当箇所は、本文eのみである。よって、相関分類としては単独となる（〔Ⅱハ〕）。外部情報となるのは、文明病としての精神障害（神経症）・自己疎外といったことを想定するのが妥当であろう。この外部コンテキストの把握は、当然困難となるだろう。

ではあらすじ分析である。

該当箇所に言及のあったあらすじは、41名（19%）であったが、そのなかで、恭一の頭痛の原因を、文脈のなかで読みとったあらすじは、次の2名（1%）のみである。

【15】月がうろこ雲からぱっと出て、あたりはにわかにも明るくなりました。ほぼ日本全国に電気供給されたためまぐるしい変化についていけない恭一をあざわらうように柱は通りすぎて行く。〔Ⅱハ〕

【16】恭一はでんしんばしらの列をみていると、少しぼんやりになり、頭が痛くなつてだまつて下をみてしまいます。これは恭一が近代化に対して拒否反応を示していると考えられる。〔Ⅱハ〕

美しい風景と、このあとに出てくる電気総長の笑い話のあいだに配されたとき、笑い話への言及自体（30%）はともかく、恭一の頭痛は唐突で、そのため、近代化の結果する神経症様の症状だと意味づけることは困難であろうことは、予想されたところである。

そのなかで、電信網の延伸・電力供給の公共性（2(2)）や、電気総長の笑い話（4(1)）から、電力普及期の人間側の憂鬱を、（それは公共への犠牲に他ならないが、）措定してみせたあらすじが、【15】【16】であった。

しかし問題は、意味づけが困難であろうとも、頭痛への言及自体が少ない点である。理由は既述のとおり唐突だろうからと思われるが、主旨判然としない箇所こそ、着目できることが今後求められる。

5. 近代化のもたらす幸福

(1) 恭一を思い遣る電気総長：〈隠されたストーリー〉⑤

① 読みとり

前章で明らかになった科学技術についての知見を有する電気総長と、近代化の趨勢に頭痛を抱

えた恭一の関係の結末が、最終場面に示されている。

f. ところが客車の窓がみんなまつくらでした。するとちいさんがいきなり、

「おや、電気が消えてるな。こいつはしまつた。けしからん。」と云ひながらまるで兎のやうにせ中をまんまるにして走つてゐる列車の下へもぐり込みました。

「あぶない。」と恭一がとめようとしたとき、客車の窓がぱつと明るくなつて、一人の小さな子が手をあげて

「あかるくなつた、わあい。」と叫んで行きました。

でんしんばしらはしづかにうなり、シグナルがかたりとあがつて、月はまたうろこ雲のなかにはひりました。

谷川(1985)では、電気総長から恭一に対し、「おまえのいやがっている禁忌や訓練」(136)も、「物質の法則は淡々として公正だ」(137)と教え諭し、「知的に挑発」(139)しての退場と捉えている。

この最終場面で捉えたい連関が、二つある。

それはともに、先にとりあげた電気総長の笑い話(4(1))と最終場面のあいだを文脈化し、電気総長の人間性を措定する点で同じであるのだが、一点は笑い話以前の恭一との交渉も含めて、もっぱら恭一との関係性を焦点化する連関であり、もう一点は、電気総長という事象の人間との関係性を意味づける連関である。後者は、次節(5(2))に譲り、本節では前者について問題にする。

恭一との関係性と言ったが、電気総長が恭一に語って聞かせた笑い話について、なぜ電気総長がこの笑い話を話さなければならなかったのかを電気総長と恭一との関係性において問題化しうることは既述した。本実践も、谷川(1985)の指摘のごとく、(ただし「公正」というより人間的スケールを超えた不思議さであろうが、「物質の法則」を教える側面があったはずだという理解に基づいている。さらに、感情的な側面も加味すべきであ

ろう。

近代化の知識の優越性をもって恭一に威圧的な姿勢を見せる、電気通信技術を体現した電信柱らに、恭一が疲弊するさまは、近代化の社会変革に対し「神経症」様の反応を呈する同時代人のそれを指し示そう。だとすれば、電気総長が語る笑い話は、電気総長による啓蒙であろうが、さらに怯える恭一を気の毒に思って、その気持ちを和らげ、関係を修復するように作用する、他の一面を看取しうる。それは、最後の場面を踏まれば、なおさらそうである。つまり、恭一は当初恐れおののいていた電気総長が走行する車両に飛びこむのをとめようと動いた——そのことである。それほどまでに電気総長が恭一に語りかけた姿勢に、恭一も心動かされたに違いないというわけである。

(加えて、電気総長は、次節にみるように「小さな子」を喜ばせる存在でもある。人間に対し、決して敵対的な存在でないことは、もはや明白と言えよう。)

この、電気総長は、時に人間にとってはなほ危険ではあるが、恭一に寄り添う面をもった存在であるということが、〈隠されたストーリー〉⑤となる。

② あらすじの分析

該当箇所は、電気総長の語った笑い話(本文d)と、電気総長の最終場面の献身あるいは恭一のとめようとした行動(本文f)とであろう。

電気総長のふるまいの間の因果を捉えるわけなので、相関分類は〔I a2b1c1〕となる。(無論、無意識裡にせよ、恭一の行動も意味化に関わっており、それを明示するあらすじがあれば、〔I a2b2c1〕とすることもできる。)

では、あらすじ分析である。

既述した電気総長の笑い話に言及した64名のうち、ほとんどが、【17】のように字義どおりに内容をまとめる、あるいは【18】のように、電信柱らとの連関で理解するかである。

【17】電気の使い方などをもっとみんなに知って欲

しい。電気では声や文を送ることができるが、物は送れない。という話をした〔I a2b1c2〕

【18】まず自分の立場の自慢をした後、自分の兵達の自慢をしたりして、ずっと自慢ばかりしていた。〔I a2b2c2〕

これに対し、恭一との関係で、電気総長の人物像を定位するあらすじは、【19】および【20】にとどまる（2名（1%））。

【19】電気総長が、心配になり、自分の存在を明かしました。しばらく恭一を安心させようとしばらく話していると、赤い二つの火が見えました。〔I a2b1c1〕

【20】電気総長のことが恭一はなぜ人間に見えたのだろうかと思った。またこの関係は話すにつれだんだんよくなっていく。それは恭一がどんどん質問していったからだ。〔I a2b1c1〕

話の摘記や、優位の言動の気づきも、重要ではあるが、文脈化という点では、出会いの場面で、「あまり恭一が青くなつてがたがたふるへてゐるのを見て、気の毒になつたらしく、少ししづかに」言葉をかけるといった共感性のある言動との連関を捉えられることも、必要であろう。

(2) 電気総長の献身：〈隠されたストーリー〉⑥

① 読みとり

では、最後の場面（本文 f）に見出すべき二つめの連関について。電気総長という事象と人間との関係性の意味づけの問題である。

通信網の延伸の過程には、通信技術の側の威圧や、無知への教化があり、その結果としての近代化の痛苦もあったが、しかしそれゆえ電気通信技術が物語世界内において否定的な存在とされているというわけではないだろう。

一方、乗客の子供を焦点化した先行研究のなかには、「既に生活の中に電気が存在することが日常となっているこの子供にとっては、とまどい、

困惑するといった身体的体験は無縁である」（安藤（1996, 179））、あるいはそれは「無心に電気文明を享受する側へと巻き込まれてしまう」（谷村（1995, 193））ことを指すなど、近代への編入を全肯定しない理解もあるようだ。

だが、もっと端的に、「客車にあかりがともって小さい子が歓声をあげるというその平凡なことがらの、平凡でない感動」（鳥居（1984, 34））を認められないだろうか。電気総長の献身と、車内灯の灯りを受益する「小さな子」の歓声を、否定的に捉えることはできないだろうと思うのである。

急速な近代化のもたらす疎外状況の受苦と、科学技術への知見を獲得するために要する努力とを条件として、高速移動と快適な速達サービスを実現できるという事実もあるというわけであろう。

それに加え、宮澤賢治作品において自然がしばしば物語を垣間見せたように、この人間の文明に他ならない電気通信網が、鉄道の運行が、それを利用する人々の生活を支えるという物語を垣間見せたのだと考えられないだろうか。なにぶん、電気総長はじめ、電信柱の行軍を恭一に幻視させるのは、他ならぬ「九日の月」の光なのである。

（こうした文脈化をするうえでも、前節（5(1)）で見たように、電気総長の人間に共感的なコミュニケーションが前景化されている事実を看過してはならないのだ。）

時に科学的知識の獲得に難儀をするなど、電気は決して扱いやすいものとは限らないが、その電気通信技術のおかげで人間社会は生活を向上しうることを、乗客の子供の歓声によって表しているということが、〈隠されたストーリー〉⑥となる。

② あらすじの分析

電気普及期に人間が演じた喜劇（本文 d）と、「小さな子」の歓声との、電気をめぐる二つの対比的な反応を連関させることによって、近代の文明がもたらす生活環境の改善を人びとが歓迎する流れが理解可能となるはずである。よって、相関分類は、離れた場所間の対比となろう（〔I a2b1c4〕）。

子供が歓声を上げる反応は自然でもあり、物語世界の背景に電気の普及期という外部コンテクストを想起させるはするが、普及期の混乱に較べれば現在電気が人々の生活を照らしている肯定的な情景と捉えることは、さほど困難なことではないのではと考える。

ではあらすじの分析である。

言うまでもなく、電気総長の献身的な行動は、「月夜のでんしんばしら」において、きわめて特徴的であることから、これに言及するあらすじは、151名（71%）あった。

そのなかでさらに、電気総長の献身と子供の歓声の連関に、電力供給の公益性が示唆されているとするあらすじも、35名（16%）あった。例えば、【21】・【22】だ。

【21】そして最後に汽車の客車の窓が全てまっ暗だということが分かるとう電気総長は列車の下にもぐり込み電気をつけた。そうすると一人の小さな子どもが喜んでいました。電気を利用して人々の生活は良くなっていることを表しているのかもしれない。〔I a2b1c4〕

【22】遠くに汽車のライトが見えると電気総長は電しん柱の動きを止めて汽車の下にもぐりこみました。すると、汽車に明かりがつかしました。電気総長は密かに皆の元に電気を届け、皆を笑顔にする存在であった。〔I a2b1c4〕

電力供給の社会的同時代的理解については、同作中に無論言及はない。だが、本文fだけからも電気総長の共感的な心性を汲みとることは可能はずだ。むしろ恭一に笑い話を話して聞かせるのも、こうした心性に起因していると、遡及的に文脈を確定させているとも言える。言及の数（71%）に比して、斯かる気づき自体は16%と決して高いとは言えない。これは、電気通信技術の普及という文脈の理解度が高かったことを考えると（2(2)）、やや残念な結果と言える。基底にこの意識があれば、【21】【22】に言及のあるとおり、電気が普及した結果の喊声だと因果の文脈を措定

しえたはずだ。

6. まとめと課題

(1) これまでのあらすじ作成活動の成果と課題

①「狼森と笹森、盗森」の読みの傾向

「狼森と笹森、盗森」の活動では、近接の連関、遠隔の連関いずれも課題であった。

まず近接の連関について、同一物の近接の連関（例えば、自分勝手だった森が、一生懸命働く開拓民を守ったこと）、異なった物のあいだの近接の連関（例えば、粟を盗んだ盗森に、砂の混じった粟餅を供出して復讐すること）も、言及が少なく課題であった。

まして遠隔の連関について言えば、同一物の遠隔の連関（例えば、冬に難儀した子供が行方不明になったこと、毎年開拓民たちが森たちに粟餅を供出するようになったこと）は、指標（指示語や共通の形容詞）があったにも関わらず、言及が少なかったし、異なった物のあいだの遠隔の連関（開拓民が森に携行した物の変化、冒頭の地名起源設定の消失）については、特に大きな課題だった。

逆に、冒頭・結末の〈単独〉（〈額縁〉・〈外部〉、すなわち粟餅の縮小化）は、気づけていた（67名）。ただ、単独の場合、外部情報の性質などにより、異なった小説間での比較がほぼ意味をなさないで、以下比較の対象としては外す。

②「水仙月の四日」の読みの傾向

「水仙月の四日」では、「狼森と笹森、盗森」から連関の気づきに進展が認められた。

同一の事物の近接の読みとり（例えば、赤毛布の子供の生還）は（〔I a1b1〕）、両義的な表現であったことを考えれば、十分読みとれていたと考えていいのではないかと（36%）。

相違する事物の近接の連関の気づき（例えば、雪婆んごの目を盗んで子供を助けたこと）は低いとは言えず（36%）、「狼森と笹森、盗森」の砂の混入（6%）に比較して、読みとれていた。

一方、課題について。まずやはり遠隔の場合だ。遠隔の場合、同一物間であっても、同一物の遠隔

の反復や前後照応（例えば、カシオペア座の前半と後半の言及、やどりぎの二度の言及）など、課題が浮き彫りになった。

さらに近接の連関の場合であっても、相違する事物間の連関の場合（例えば、二つの美しい情景描写、雪童子の言葉を子供が聞く末尾の〈交通〉、「とる」と「死ぬ」のディスコミュニケーション）でも、言及が少なかったので、課題と言えた。

単独の読みとり（例えば、雪童子と子供との非対称性、雪童子の出自、やどりぎの文化的記号、）は、「狼森と兎森、盗森」（栗餅の縮小化）から一転、課題を残した（1%）が、既述のとおり、比較の要素とはしない。

(2) 「月夜のでんしんばしら」のあらすじ作成活動の成果と課題

近接の連関については、「水仙月の四日」から引き続いて、進展が認められる。

近接した場面間の場合、相違する物の間の連関（例えば、電信柱の行軍が通信網の延伸を指すこと）であっても、有意な成果が認められたし、同一事物の反復（例えば、電信柱たちの威圧的な態度）でも、言及は多かったと言える。

離れた場面間の連関については、文脈を見出そうという兆しが垣間見えた。

文中離れていて各々相違する物の連関（例えば、美しい情景が物語世界に幻想を現出する）についての言及（停車場19%、月光19%）、相互に離れている同一の事物のあいだの連関（例えば、電気総長が恭一に笑い話を聞かせること）などの言及自体（30%）、ともに少なくなかったし、同じく相互に離れている同一の事物のあいだの連関（例えば、笑い話を恭一に話して聞かせていた電気総長が、乗客への献身について子供に歓声をもって迎えられる）は、その言及の多さに、有意な傾向が認められた（71%）。

ただ以上は、あくまで兆しであって、言及する（焦点化する）だけではきっかけを得たに過ぎず、そこから〈隠されたストーリー〉を見出さなければ、読みとりの力と認めがたいのは、無論である。

よって、作中離れている物のあいだに連関を見出すことが、やはり課題であることは変わらない。

離れている同一物の対比的な連関（例えば、九日の月の、出現と隠れ）は、その最たるものであり、既述のとおり読みとりの力が試されると期待したが、言及は極めて少なかった（2%）。シグナルの前後照応を含めても大差ない（8%）。

なお、「月夜のでんしんばしら」の場合、単独（例えば、恭一の痛苦）についての言及の数こそ増えているが（19%）、この恭一の様子は、電気総長との関係性のうえでも、電信柱の行軍の性格づけのうえでも着目すべきであることを踏まえると、決して多いとは言えないだろう。しかし、既述のとおり、単独は読みとりの力の推移をはかる指標からは除外した。

(3) あらすじ作成活動の総括

読みとり付加型あらすじ作成の活動をとおして、生徒たちに小説の各部分を相互に連関させる意識を、一定程度もたせることができたと考える。

それは活動を進めるなかで、生徒たちの作成するあらすじに、近接する事物の連関を捉える読みとりが有意に認められるようになったからである。電信柱の行軍の意味、電信柱の威圧的な態度への言及がそれである。読みとりに一定の変化があったことは間違いない。

この活動をとおして、生徒が読みとりに苦心したのが、作中離れた要素を繋げる、遠隔の連関の読みとりだ。同時に、連関する相互の要素の作中の距離もさることながら、連関が同一物の間のものなのか否かで、読みとりに差が生じることは容易に想像がつく。同一物であれば、作中に反復して言及があるということだから、それを着目すべき指標として、認知しやすいからだ。

その意味で、遠隔の連関であっても、例えば電気総長の最後の献身にいたる人物造形の変化といったことについては、実際生徒たちの言及が多数あったことは、当初より苦心した遠隔の連関についても、小説を読む際に注意する意識が根づいてきたことを示すだろう。

無論、九日の月の出現と隠れのような、明確な対応についての言及が少ないなど、この点についても依然として課題であることは明らかである。これについては、例えば小説の冒頭と末尾に、対応関係をつくるという、小説作法を意識することも重要だろう。

一方、離れて描かれる相違した物のあいだに、対比にせよ、因果にせよ、連関を見出すのは、さまざまな文脈の可能性がある分、一つに決め難い、あるいは自分の措定した連関が客観性をもつか、検証するのは容易ではないだろう。これについても、文中離れていて各々相違する物の連関に、例えば情景と人物の内面との連関があるといった、小説作法の一つの型を理解することも有効な手立てだ。

いずれにせよ、遠隔の連関の読みとりを推進するうえで、小説という表現を読む経験値を増やしていくという手立てが考えうるのである。

ただし、こうした経験値は、あくまで一つの参考であって、時代も表現様式もさまざまな小説を読んでいくことを想定すると、それぞれの小説のモードを理解することは現実的ではない。汎用性に欠けるのだ。慎重に要素間の連関を図るに若くはないと考える次第だ。

以上が、小説を略記するなかで、どの要素を残すか、冒頭から自分で検証していくなかで、〈隠されたストーリー〉の発見を喚起する、読みとり付加型のあらすじ作成が有効だと考える所以である。

注

(1) 電力の普及の歴史的推移については、大塚(1993)、安藤(1996)などを参照。ただし、中学校における授業実践としては、小説の時代背景に焦点をあてることは、教科の性質上ふさわしくない。よって、本作の解釈に、同時代状況をいかに関わらせるべきかについての稿者の考えは、本稿では述べず、別稿に譲ることとする。

(2) 『注文の多い料理店』収載の小説は、書き下ろしという扱いができ、『注文の多い料理店』

の「序」と『広告ちらし(大)』(杜陵出版部・東京光原社、大正13・11)は、読者に読解のコードとして参照されていると捉えてよいと考える。ゆえに「月夜のでんしんばしら」については、「うるこぐもと鉛色の月光、九月のイーハトヴの鉄道線路の内想です。」という一文は読解コードとして機能している(つまり舞台は岩手県、東北本線)として、さしつかえないだろう。

(3) 立原(1990)の物語画のスクーリング実践報告でも、「社会的関心」に基づいた小説理解は、「テーマ解釈の許容範囲をいささか逸脱している」(38)と指摘される。

(4) だが、恭一の頭痛の由来は月光より行軍自体にあるとみるべきで、殊更月光の、電信柱に対してと、恭一に対しての効用を、対蹠的に捉える必要はないだろう。月光については、すべからく作中人物たちに良い影響をもつとすべきであろう。恭一の頭痛については4(2)を参照。

(5) 谷川(1985)では、小説全体を教育の場が仮託されたものと捉える観点から、「兵隊というよりは、いじめっ子たちが標的になった子をいびるときの光景」と捉え、本文eの恭一の姿に、いじめを忍従する「気の弱い自己閉鎖的な少年」を見ているが(127)、通信網の行軍を「自然力を法則的に制御したシステム」とする理解と(法則の側がいじめの加害者となる点で)合致せず、整合性に欠けると考える。

(6) だが、「〈力〉の葛藤・交錯する〈場〉」(安藤(1996, 185))として恭一を図式化することは避けたい。恭一の痛苦は電機総長を助けようとする後段の変化の一過程であるからだ。また、谷村(1995)の月光の作用の二面性については、注(4)に指摘したとおり。

引用文献

- Wolfgang Iser (1976) *DER AKT DES LESENS* / 饗田収訳 (1998) 『行為としての読書』岩波書店
秋枝美保 (2006) 「月夜のでんしんばしら」『国文学：解釈と鑑賞』(平成18・9)

- 安藤恭子 (1996) 『宮沢賢治〈力〉の構造』 朝文社
- (1986) 「月夜のでんしんばしら—幻想と逸話の再構成—」 『国文学解釈と鑑賞』 (昭和61・12)
- 伊藤博美 (2011) 「『月夜のでんしんばしら』小考」 『賢治研究』 (平成23・7)
- 遠藤祐 (2010) 「『月夜のでんしんばしら』: 主役が次々と交代していく物語」 『學苑』 (平成22・8)
- 大塚常樹 (1993) 『宮沢賢治心象の宇宙論』 朝文社
- 岡田浩行 (2023) 「読みとり付加型あらすじ作成—宮沢賢治『水仙月の四日』編—」 『岩手大学教育学部研究年報』 (令和5・3)
- (2022) 「読みとり付加型あらすじ作成—宮沢賢治『狼森と策森、盗森』編—」 『岩手大学教育学部研究年報』 (令和4・2)
- 河野真太郎・大貫隆史 (2006) 「受容理論」 『現代批評理論のすべて』 新書館
- 加島篤 (2011) 「童話『月夜のでんしんばしら』の工学的考察」 『北九州工業高等専門学校研究報告』 (平成23・1)
- 小関和弘 (2008) 「解説『月夜のでんしんばしら』」 『知っ得宮沢賢治の全童話を読む』 学燈社 (平成20・3)
- 高橋世織 (1996) 「水際の身体」 『現代詩手帖』 (平成8・10)
- 立原慶一 (1990) 「物語画の研究:宮沢賢治作『月夜のでんしんばしら』をめぐって(美術教育の基礎理論と方法論に関する研究論文)」 『美術教育学:美術科教育学会誌』 (平成2)
- 谷川雁 (1985) 『賢治初期童話考』 潮出版社
- 谷村長敬 (1995) 「『月夜のでんしんばしら』考: 佇立する少年」 『『注文の多い料理店』考』 五柳書院
- 鳥居邦朗 (1984) 「『月夜のでんしんばしら』」 『作品論宮沢賢治』 双文社
- 村上英一 (2004) 「『月夜のでんしんばしら』を読む」 『賢治研究』 (平成16・7)
- 米地文夫 (2013) 「宮沢賢治『月夜のでんしんばしら』とシベリア出兵: 啄木短歌・「カルメン」・「戦争と平和」との関係を探る」 『総合政策』 (平成25・3)